

1986-10

No.217

【表紙】

国民文化祭
総合ポスター
亀倉雄策

題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

▶巻頭 バトンを受けて 大崎 仁 4

特集 国民文化祭

国民文化祭の概要	5
てい談 国民文化祭を語る	6
三浦 朱門	
石井 歡	
倉橋 健	
国民文化祭によせて／第一部	
日本文化に占める錦鯉	14
土屋 陽三郎	
国民文化祭とコントラクトブリッジ	15
大内 淳義	
文化の贈りもの	16
丸島 秀夫	
日本文化を次世代に	17
山本 恭人	
第1回国民文化祭主催事業日程・会場等	18
国民文化祭によせて／第二部	
甞れ地方の音楽よ	19
石丸 寛	
民謡と私	20
春日 由三	
生活文化の広がりを願う	21
小久保 茂昭	
佐用の朝霧	22
額田島一二郎	
「国民文化祭」への期待	23
加藤 衛	
資料	24
国民文化祭開催要綱／国民文化祭実行委員会名簿	
国民文化祭企画委員会名簿／都道府県別出演団体	

▶名勝紹介シリーズ⑥◀

夢窓国師の庭 —天龍寺と西芳寺— 26

偲うこく

第十回全国高等学校総合文化祭 28

— 全国から大阪へ — そして未来へ —

・文化庁行事報告及び予定	30
・トピック／「日本美術名宝展」開催される	30
・人事異動	30
・国立劇場二ユース	31

特集：国民文化祭

パフォーマンス、それから、自分たちの服飾というのをかなりはつきりと主張し始めた。彼女らは自分たちの好みのへんてこりんなものをあこがれの目で見、自分なりの価値観を見出そうとしている。これが近ごろの新しい傾向。つまり、昭和二十五年から始まった二十年間の経済の時点、それから以後、二十年間続いた新しい胎動の時代というものを経て、これから迎えるようとしている時代が、そういうものじゃないかと思っているんです。

石井 全くそのとおりだと思いますね。音楽家の専門の社会で、第二次大戦後、それぞれ非常に個性というものを尊重しまして思い切ったことをやった時代があるんですね。いままでの音楽の概念では律し切れないような音楽が巷に大いに溢れたというようなことがあったんですね。それが、最近になりますと、一般に広い範囲でそれが普及されてきているということはいえると思います。

いままです芸術というと、すぐに専門家というところに焦点が絞られておったようなんですけれども、これからはそうじゃない世界で大きく展開していくという可能性が非常に多いんじゃないかと思います。

そういった意味で、たまたまこの国民文化

国民文化祭の意義

三浦 いま、「関係ねえや」という層が出てきたというのは、とても大事なことで、専門家であるということのために、自分の専門に対する誇りを持って、ひたすら突っ走ったと思うんですね。突っ走った結果、お互い

祭というものの意義は、非常に大きなものがあるんじゃないかという印象を持っております。

倉橋 各自が個性的な表現を身に付けて町や村でやるのは、大変結構だと思うんですけど、それがいままです築き上げた文化の一つの水準というものにフィードバックだけで反発する意識のほうが強くて、あまりにもでんでんばらばらで、例えば、古典でいいものがあっても、「関係ねえや」という言葉で片付ける面が、一方で出てきているような気がするんです。そういう点で、こういう国民文化祭という形で、いろいろな地方、いろいろな世代の人が集まってジャンル別にやり、さらにはジャンルを超えて交流が生まれ、自分たちがやっていることを見つめなおすきっかけになると、大変意味のあるものになると思います。

専門が離れて、かなり理解しにくいような状況になっている。そういう時に専門家である芸術家たちがやってくることに對して、一般の国民が、「そんなこと俺に関係ねえや」というふうな気持ちを持ち始めた。別ないい方をすると、文化の一種の二重構造ができたのではない。ヨーロッパの芸術を学ぶ者は、ヨーロッパ人と肩を並べて、あるいはそれ以上のレベルを達成するということを考えて、日本という土壌を忘れてる。日本の伝統的な芸術に従事する人たちは、いかんして古典的な世界を再現するか、復興するかということに一生懸命になっている。その結果、高い専門家のレベルと、その専門家の高きとはあまり関係のない一般の庶民のレベルというのができたんじゃないか。つまり、国民文化祭というよりも、文化庁が芸術祭の反省として、いろいろな試みをしている。ことに地方開催の場合に、土地のプロとかセミプロみたいな人と中央の芸術家が一緒になって一つの作品を作るという試みをしているのは、その二重構造を、何かの形で埋めようとしていることじゃないかと思えますね。

ですから、芸術祭というのは、一方において、そういうプロの芸術家のレベルを高め、その存在を一般国民に訴えようとする動きを

てい談

国民文化祭を語る

〈出席者〉（敬称略、発言順）



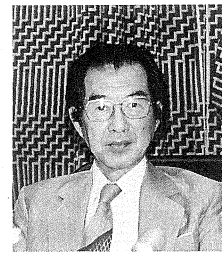
三浦 朱門

国民文化祭実行委員会
会長／作家



石井 歓

（社）全日本合唱連盟
理事長



倉橋 健

早稲田大学教授

物から心へ

三浦 「物から心へ」とありますけれど、昭和二十五年ごろから万博のころまでの二十年間は、日本国、大体一致して共通の目標があったと思うんです。つまり、食べるようにならなければいけない。少しでもアメリカに近づくような物質生活をしよう。その二十年の終わりのころになると、公害だとか、高度経済成長のひずみだとか、そういう逆作用が出てきた。ちょうど万博のころ、一応その目標は達した。あとどうしたらいいか。もう国民的なコンセンサスみたいなものはないんですね。ある意味では虚脱でもあるし、あるいは目標を喪失した時代ともいわれるわけです。結局、量ではないんだ、質なんだということがいわれて出した。それが「物から心へ」というか、物質文明から精神文化へということじゃないかと思うんです。

ですから、この二十年の間に時間的、物質的なゆとりができると同時に、いろいろな人がいろいろなことを始める。昔はみゆき族なんていう変な女の子が銀座裏にいたんですけども、それが原宿あたりにたむろして、自分たちの音楽、自分たちのダンス、自分たちの

特集：国民文化祭

土着の芸術の広がり

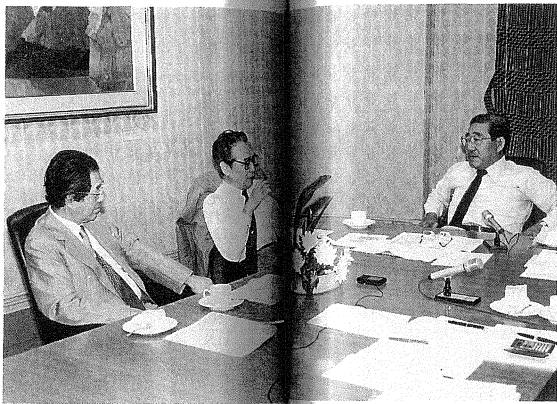
三浦 明治というのは面白い時代でして、近代化をしたわけなんですけども、それをまず社会の次元で、ヨーロッパと同じようにするというので、芸術もそのレベルでは全部、西洋風の芸術にしてみました。それに對して家庭は各々自分勝手にしろと。そこで一種の二元論ができるんですね。家では歌沢をやったり、浪花節を聴いたりするけど、学校で習うのは「箱根の山は天下の嶮」だったり、その中から西洋音楽のほんとうの愛好者もまた育っていく。家庭の中でも存続していた文学でいうと、俳句とか川柳とか短歌というのがあるかと思うと、学校で習う高級な思想を述べた西洋風の文学を一生懸命読む。この二つの乖離というか、くい違いというのは、実はありとあらゆる部分にあった。こう

持っているのであって、これは恐らくこれから以後も決して衰えることはないと思うんです。同時にプロの芸術に對し、庶民はそれなりに自分たちの芸術的な関心を、その行動に表したいわけですね。それに何か形を付ける。プロの芸術祭と對比するという意味じゃないんですけども、その間に大きな距離ができています。それをつなげようとする。それが少なくとも私が長官であったころ考えた国民文化祭というものの基本的なアイデアです。

石井 歴史を見ても、芸術活動というのは、大衆 民衆の中に育ってきたんです。これも音楽のことで話しをまとめますと、本職の音楽家というのができたのは二、三百年前の話なんです。ルネサンスの時代は、もう完全に民衆が音楽の歌い手であり、享受者であり、作曲者であり、また作詞者でもあったわけなんです。最近の日本の国内に絞ってみますと、音楽の世界で、いわゆる専門家でない人でも、非常に技術的に高い音楽を実際に演奏できるような世の中になってきたんですね。そういう世の中なのに、これをほったらかしとしてこれは素人であるという場を与えないというのもおかしな話です。

そういう意味で、このごろは大衆の中に音楽というのが、ものすごく生きてきている。

かつてはもう専門家だけでやってたものが、大衆の中に生きてきているというのが現状だと思っんです。大衆の中で芸術というものが大きく育っていくところが大切なのではないでしょうか。芸術を享受する主体は大衆だと思っんです。それはただ聴くんじゃなくて、実際に携わる。創造の喜びを感じるというところにあると、私は常々そう思ってるんです。



三浦 戦前、〈未完成交響楽〉という映画があつて、あの中で泉のそばで女の子たちが洗濯して歌を歌っている。その歌を歌ったのを聴きながら、ふつと靈感のように「泉に沿いて」というあの歌を作曲するというものになつてまして、子ども心にあれを非常に感動的に見た覚えがあるんです。大人になつてイタリアなんかに行きますと、オペラなんかのあんな発声法と、街で普通の人が歌っている発声法と洗濯の女の子がやっているのと、それから

レストランなんかで弾きにくるのと、みんな一続きなんです。そこに断層がない。つまり、イタリアの音楽というのは、すうっと富士山のように広い裾野の上にあつて、その最高峰としてオペラなり、プロの歌手がある。日本の場合、裾野をずっと持っている峰が素直にいつてないような気がするんです。

石井 そのとおりですね。日本の場合は、三味線とか常磐津、当然、長唄とか歌沢、こういったものは昔は相当、大衆の中に生きていたわけですね。最近ではどういう形になっているか、我々はあまりよくわからない状態にある。先ほどの話のように分業化されてきたんですね。

昔は文士も作曲家も演劇の演出家も、みんな同じ所でござろして、お互いに摩擦を起こしながら芸術活動をやつた。あれがなくなつちやつたわけですよ。いろいろな芸術が同じ場で大きくやるということは、また別な発展性があると思っんです。ただ、素人が集まって楽しくやるだけじゃない。もっと大きなものがあるような気がするんですがねえ。

倉橋 いまNHKで三味線のレッスンをやっている。テキストもよく売れ、そういうような関心を持つ人たちが底辺で広く出てきている

大切にしている。これは私は大変すばらしい進歩だと思っんです。これからはほんとに日本のいわゆる『土着の芸術』が広がっていくと思っんです。

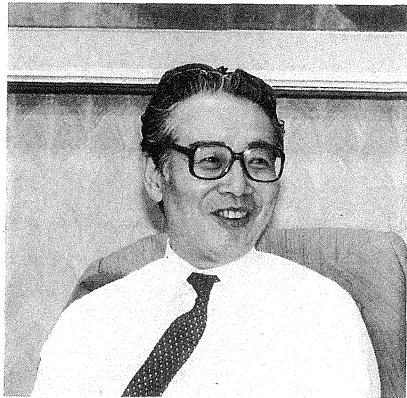
倉橋 西洋的な芸術の技術をマスターした上で、自分たちのいま生きている土壌は何だろうと考える、新しいものをうみだそうという動きが、いろいろな形で出てきていると思っんですね。

三浦 能なんかにいたしましても、新しい作品が作られない時に、そのジャンルの芸術というのには、私は生命力が微弱になつていくという感じがするんですね。私はもう高校生なんかが出来を作っているんじゃないかと思っんです。その場合の音楽はあの謡である必要は必ずしもなくて、彼らのビートのきいたニューミュージックであつてもいいと思っんです。そういうものと古典的なものが、実はそれほど無縁でない。

倉橋 あえて新しい能と名付けなくても、カンタータでもオラトリオでも、舞踊劇でも、あるいはそういうものをひっくりかえしたパフォーマンส์でもいいでしょうね。イエーツの『鷹の井戸』の例もあるし。

石井 だから、勉強の対象なんです。それが先ほどのお話のように、私は最近変わってきていると思っんです。教養主義から、も

っともつとはばして、自分たちの感覚を



プロの役割

石井 この国民文化祭の参加資格には何か特別なものがあるんですか。

三浦 ないでしょうね。

石井 私は国民文化祭の参加資格はないほうがいいと思うんですよ。芸術の世界に職業芸術家もアマチュアもない。国民文化祭の趣旨に賛同した者は大いに参加するみたいなのがよいと思いますね。

三浦 はい。また、プロが要所要所を締めないと、まとまりが付かないところがあるんですよ。



国民文化祭の方向性

石井 文化庁としては、戦後、芸術祭というものを中心に、専門の芸術関係のことに非常に力を入れて、大成功しましたね。四十年経って、今年からですか、随分改革されたのは、三浦 去年ですね。

石井 去年、随分形が変わった。国民文化祭はいろんな意味で、専門家にも影響を与えるようなものになりたい。これがある大きな日本国の芸術活動の一つの根源になるかもしれない。

三浦 私は第一回というのは、とにかくやっ

てみて、みんなに悪口いわれるためにやるどころがある。悪口いわれる時に、じゃあ、どうすればいいかということが出てくる。こうすべきものがなかった。当然こうあるべきものがなかった。それを第二回以降に持っていけばいいわけなんです。

石井 結局、第一回ということは点だと思ってるんですよ。この点は右にも行くし左にも行く、三百六十度、全部、どこでも行くわけですよ。来年になると点が二つになることによつてある種の方向、三つになれば、相当確立してくるといったような形で、これから大きく展開してくると思うんですがね。

倉橋 世界のいろいろな国でプロやセミプロの芸術家による音楽祭や演劇祭がいろいろあるけれど、みんないろいろな試行錯誤をしたり途中で中断したりしながら、参加者の幅や層をひろげながらずっと続けていますね。

三浦 つまり、一番初歩的には参加した人が楽しければいいと思うんですがね。

倉橋 そうです。そして来年もまた出ようという気になる。

三浦 自分たちの特殊なジャンルあるいは自分たちの特殊な地域のものを持っていて、それをほかの人たちにつけたり、体験を交換し合ったりする。それだけで最低限いいこ

とじゃないかと思っていますね。東京は何か文化の中心みたいな印象がありまして、地方は全部東京を真似したわけですが、東京もやはり一つの地方ですから、そういう形で地方を主張する。地方の特殊な芸能とか、地方が持っている問題を芸術的な形で表現するとか、そういうことに新しい意味があるというふうに思っていますね。

倉橋 文化祭でやったものを、たまたま見た人、聴いた人が、「そういうえげうちにもこんなものがあるんだ」とかいうようなかたちで刺激をうけ、輪がひろがっていけば、たいへん望ましい。

三浦 別に狭い意味の芸術とは限らなくて、食物でもいいんです。『どうだ。俺の地方の雑煮、うまかろう』というの、何か楽しいコンテストのような気がするんですよ。

倉橋 そういう雑煮なんかは、生活文化フェスティバルの部門に入る可能性がありますね。三浦 そういう雑煮の交流の中から、新しい雑煮ができるのかな。

それと同じようなさまざまな地域の踊りやなんかの交流の中から、新しい日本の舞踊ができると思う。そんなようなことができれば大変素晴らしいと思うんですがね。

石井 実際問題としてありますね。プロがどういう形で参加するかということは、これから段々決まってくると思いますけれども、実際問題として、プロもアマもない。あるのは本当の芸をそこに提供しているかどうか、だと私は思っています。ともかく何らかの形で参加してもいいといったことにはすべきでしょうね。

三浦 ことに地方芸能の場合はプロになり得ませんから。自分はその地域の津軽三味線なら津軽三味線で生きているんだけど、なりわいのために酒屋をやっている、リングロをやってるというふうな方がいらつしやるわけです。生活の収入をどういう形で得るかというと、ことだけで、プロ、アマを決定することはできないと思うんですがね。

石井 生活文化なんというのは、どんな形になるんですかねえ。おもしろいのができるんじゃないかと思うんですよ。

三浦 囲碁、将棋とかお花、お茶、それから、服飾なんてありますね。

石井 毎年、国体版みたいに各県持ち回りと書いてありますけれど、そうすると各県の特色を相当強く出さないと、何のために持ち回っているのか、わけわかんなくなってしまう。それなんかこれからの問題じゃないでしょう

か。ある意味では、さっきのお話のように第一回は問題提起でいいわけですからね。

倉橋 各県が国体に注ぐような情熱をもってこれに取り組んでくれないと困りますね。

三浦 国民文化祭のバイオニアみたいな形で、全国高等学校総合文化祭というのがありますが、自分たちの土地の伝統的な芸能の伝承に一生懸命なんです。

石井 文化とか芸能というのは都会よりも地方のほうが深いんですね、触れ方が。

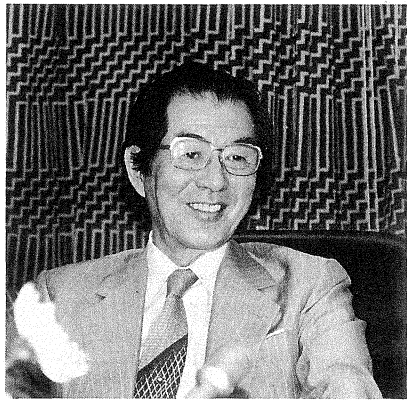
三浦 勉強する姿勢が問題じゃないでしょう。石井 合唱なんかを見ましても、大都会よりも町村のほうにうまいのがあるんですよ。ただ形だけがうまいんじゃないで、取り組み方が私はとてもいいと思う。

有効な発声法を

三浦 どうでしょう。日本人の歌の発声ですけど、日本の伝統的な音楽と西洋風の出方と、あまり……。

石井 違い過ぎるくらい違いますよ。ヨーロッパから入った普通の合唱形態と、いわゆるベルカントといって、響きのある声と称して声楽家が出すようなあいう声ですね。

特集：国民文化祭



いことをしなくなりましたからね。

三浦 ほんととつくるということは、プロは大変だけど、アマチュアである限り、つくるということが一番楽しいことなんですよ。

倉橋 今度のこの国民文化祭でも、プロが入ってアマチュアと一緒にあって、プロ対アマということでなくて、一つの共通の目標に向かって芸術をつくっていくということも大切でしょうね。

三浦 アマチュアが、ほんとのプロの偉さを知ってほしいという気がしますね。表現するというのは、どんなに大変なことかということ。それはやはり一番先にいった。個性的な一人ひとりが自分の納得するような人生を送

れたから、やはり、劇場ではベルカントのほうがいいでしょうね。(笑い)

石井 いや、例えば、日本のオペラ作品では、百パーセント、ベルカントということはない。邦楽調の声の出し方がドラマとして有効だったら、遠慮なく使うというのが、最近の傾向じゃないでしょうか。

三浦 一番迷ってるのは一般の素人なんで、どういう声で歌っていいかわからない。みんな迷ってるんです。声の出し方、喉の詰め方、倉橋、そういうことの実験の場になってもいいですね。

三浦 そうですね。

倉橋 石井さんがご指導なさってアドバイスなんかねえ。

石井 いろんな可能性を求めるべきだと思います。そこから新しい芸術が生まれるのだと思えるのです。

三浦 国技館で〈第九〉を歌う会ね。ソロで歌う時は、その人の声の良さとか音楽的な才能というのは絶対ですよ。しかし、二千人、三千人を超しますと、もう声の良し悪しじゃなくて壁面全般が音を出してるような、コーラスとは別物という気がします。あれはやはりマスの威力でしてね。そういう意味で、私は国民文化祭というのは、プロと張り合うん

ところ、邦楽とか、そういう分野で使ってるのは、ベルカントじゃなくて地声などを使っています。それから頭声。そういったような特殊な発声法で合唱という形態を使って、ある種の表現をするということも必要なんじゃないか、というように多様になってきている。

三浦 頭声というのは？

石井 頭声というのは、頭に抜けたような。三浦 イスラムの。

石井 そう、そう。あれのもっとデリケートなやつがあるんです。

三浦 いま日本人はどういう声を出して歌っているんでしょうか。地声でしょうか。

石井 ベルカントに近づけた声而努力してやってくるんです。合唱といえば、それがやはり中心をなしてる声の出し方ですね。

三浦 私は、ヨーロッパの石造りの教会でエコーに殺されないためには、自然にベルカントが出てくるという気がするんです。日本のようにふすまと量の音が吸われちゃうところでは喉をつめた発声法以外、しょうがなかったのかなという気がするんです。

石井 伝統芸能というのは、そういうものですか。

三浦 日本でもコンクリートの部屋ができた

るためには、レディ・メロドを与えられるばかりではなくて、自分の生活をつくっていくなければいけないんだということを知るために……。

俳句なんかの場合でいいますと、プロというのは偉いと思うのは、何百首作ろうと、そこに一定のレベルがあるんですよ。素人はひよっとすると一句ぐらい素晴らしいものを作るんです。新年の歌会始の一般の国民が作った歌の中で、プロの作った歌と一緒にいろんな生活の歌があります。それは個々の歌に関する限り、これは立派なものなんです。ただ、プロの偉さとアマチュアの偉さとは、目的も違うし質も違うような気がするんです。その目的と質の違いをはっきりして、素人が自分たちの作品を知ることというのは、やっぱり日本が文化国家になるということでしょうね。

石井 作曲科の学生なんか「芸大を卒業して一人前になって、作品を頼まれたら、音楽と名の付くものだったら何でもやりなさい。もし、流行歌を作れといわれたら、それもやってみろ。そして必ず八十五点以上取らなきゃ駄目だよ」。それがいわゆるプロであり専門家なんですね。「コンスタントに八十五点取らなきゃいかん。六十点取ったりしてるんなら素

じゃなくて、プロが「これは従来の芸術とは関係ない、これはまさにマスの力である」というふうなものを編み出したらいいなあと思いますね。

（この喜び）

石井 私心配してるのは、プロと競合するようなものになったら失敗だと思っただけです。違う世界を作らなきゃだめです。それがプロにも影響を与えるようになれば『万歳』だと思っただけです。

三浦 ですから、演劇なんかことに有名な劇作家の書いた作品をやるんじゃないで、その土地のテーマを、その土地の言葉で、その土地の人が書いて芝居でやってほしいというのは、そのことなんですね。

倉橋 まったく同感です。全国の高校演劇祭でも、そういう傾向が強まっています。同じことは音楽なんかにも望みたいですね。

石井 作曲というと、なんかむずかしそうにお考えの方もいるようだけど、仲間のだれかが作曲すればいいんですよ、いわゆる創造の体験を持たせるということも、重要だと思っただけです。『創る』ということですね。最近の人々は、なにかつくるなんていう面倒くさ

人だから、もうやめたほうがいい」というようなことをよくいいます。そこが専門に勉強した人間とアマチュアの違うところだと思っただけです。

三浦 そうですね。非常に特異な体験をした人は、その体験を書きますと、いろいろ過不足はあるにせよ、訴える力の強い作品を作りますよ。それに対してプロの小説家というのは大した生活してるわけじゃないで、その中でやはり小説書かなきゃいけない。それがプロの大変さであると同時に、アマチュアというのはプロの持つていない、そういう素晴らしいものを、その生活の中に持つているはずなんですね。

石井 それが人間なんじゃないですか。人間の証ですね。

(了)



じゃなくて、プロが「これは従来の芸術とは関係ない、これはまさにマスの力である」というふうなものを編み出したらいいなあと思いますね。

（この喜び）

石井 私心配してるのは、プロと競合するようなものになったら失敗だと思っただけです。違う世界を作らなきゃだめです。それがプロにも影響を与えるようになれば『万歳』だと思っただけです。

三浦 ですから、演劇なんかことに有名な劇作家の書いた作品をやるんじゃないで、その土地のテーマを、その土地の言葉で、その土地の人が書いて芝居でやってほしいというのは、そのことなんですね。

倉橋 まったく同感です。全国の高校演劇祭でも、そういう傾向が強まっています。同じことは音楽なんかにも望みたいですね。

石井 作曲というと、なんかむずかしそうにお考えの方もいるようだけど、仲間のだれかが作曲すればいいんですよ、いわゆる創造の体験を持たせるということも、重要だと思っただけです。『創る』ということですね。最近の人々は、なにかつくるなんていう面倒くさ

編集後記

○第一回国民文化祭の主催事業が、いよいよ11月22日から始まります。○ポスター、テーマ音楽も完成し、スポットもテレビを通じてお茶の間に流れていることと思います。またポスターデザインのテレフォンカードも発売されました。

○そこで今月号では、三浦前文化庁長官、石井先生、倉橋先生に忌憚のない意見を交わしていただき、また主催事業の各分野に関わりの深い九人の先生方に国民文化祭へ寄せる想い、期待等を語っていただきました。○国民文化祭が真に「広く文化活動への参加の機運を高め、新しい芸術文化の創造を促す」きっかけとなることを祈念しています。○皆さまのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。(S)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)3681-2411(代表)

「文化庁月報」十月号

(通巻第二十七号)

昭和61年10月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒104 東京都中央区銀座7丁目4番12号

営業所 〒105 東京都新宿区西五軒町52番地

電話 (03) 2681-2411 (代表)

振替口座 東京 91161番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)